NEWS LETTER
都市史研究
THE URBAN HISTORICAL SOCIETY OF JAPAN
VOL. 54 2006 1215

年の瀬も押し迫ってまいりましたが、皆様におかれましてはますますお元気でお過ごしのことと存じます。本年最後の発行となります、都市史研究会のニューズレター54号をお届けいたします。先号が発行された９月から本号までの期間には都市史研究会が始まって以来ではないかと思えるほどのペースで活動が行われ、おかげさまでどれも無事に終えることができました。都市史研究会では今後も基本的に月一回のペースで例会を開催する予定ですので、引き続きみなさまのご参加をお待ちしております。

本号ではこうした2006年９月から12月までの活動の内容と今後の予定について報告いたします。具体的には９月と11月に行われました例会、10月に行われましたアラン・チレー氏を招いてのラウンドテーブルとワークショップ「伝統都市の比較史」、11月に行われました都市史研究会シンポジウム「分節構造と社会的結合」について、報告要旨や感想を掲載いたします。なおこれらの活動はいずれも科研費基盤研究「とらっど３」との共催により行われています。

先号から発足しました新たなニューズレターの発行体制ですが、当初のドタバタを乗り越え、ようやく軌道に乗り始めました。今後は基本的に季刊の頻度でお届けできる予定です。末筆ながら本年もニューズレター都市史研究をご愛顧いただき有難うございました。来年がよい一年でありますよう、皆様のご多幸をお祈り申し上げます。

第58回都市史研究会例会（第４回とらっど３研究会）

９月29日、東京大学出版会第一会議室において、第58回都市史研究会例会（第４回とらっど３研究会）が行われました。当日は江下以知子氏による小野将氏の著作の書評と、加藤玄氏による報告が行われ、活発な討議がなされました。書評内容及び報告要旨は以下のとおりです。

書評　小野将「「国学」の都市性――宣長学のいくつかのモティーフから」（「都市・建築・歴史シリーズ６」『都市文化の成熟』東京大学出版会、2006年、所収）

小野氏は、近世思想史上の巨大な問題である「国学」について、「国学者」をむしろ近世都市における「異端」の位置におかれた「身分的周縁」と位置づけ、従来の「国学」を近世都市文化の一例として出自や生活行動に還元する研究とは一線を画した分析をしてこられた研究者である。

現在までに氏は、草莽から中心的イデオローグにいたる幅広い対象を扱い、「国学」の孕む問題を、①神職の体系の中での周縁的位置と本所による組織化への対応、②身分間を横断する学文ネットワークの形成、③異端的・周縁的な「国学」

思想自体の公許化（本所・「公儀」などによる）をめざす方向性、④　①②③でクロスする「草莽」と中心的イデオローグの姿、などの点を中心に描出している。これらは国学についての現在までの歴史学的な分析の視点をほぼ含み、かつ「思想」としての「国学」と「運動」の有機的関係づけに挑みながら「国学」、「国学者」、「国学的言説」の局面における多角的な身分的周縁像の描出に成功しているものと言えるであろう。

本稿では「本居宣長」をとりあげ、前半では青年期宣長の読書傾向や彼の手になる系図・絵図類から思想家宣長の認識的資質にひそむ近世都市の影響について、また後半では宣長の上京に関する記録を主な題材に近世に息づく権門都市京都と「身分的周縁」たる国学者宣長の思想的、社会的かかわりを描いている。

前半ではまず具体的に地誌・名所記と抄録稿本について貝原益軒の影響や出版物を媒介とした近世的な言説の編成が先行していることを指摘し、宣長のブッキッシュな知に傾倒する性癖を示す。また彼が作成した系譜と城下絵図に、世界の空間化による知的把握という指向を見、特に架空の『端原氏系図』・『端原氏絵図』においては近世都市の特質の具体的影響を指摘している。

後半では、青年期宣長が体験した年中行事や貴種の目撃など権門都市京都の祝祭空間が宣長の復古的思想形成に与えた影響を、また老年期の宣長と異端たる「国学」の社会的勢力伸張と京都の公家・朝廷勢力との関わりを示し、幕藩権力の中心である江戸や他城下町とは（少なくとも表象面では）別の原理で存在する京都の「都市性」、また「国学」とその「都市性」の密接な関係を示した。

このように本稿は「国学」の「都市性」を思想及び社会権力の両面に踏み込んで描かれた大変魅力的な論考であるが、読者に文学、思想に渡る幅広い背景的知識を要求する分野でもあり、紙幅の関係と論理の明晰さを保つ目的から説明が簡略化されているため、多少の解り難さも存在する。

まず、質疑で筆者が提示した宣長と京都との心理的距離について、氏は既往研究とは次元を異にする、伊勢を含めた宣長の他都市認識の中でのより繊細な理解をお持ちであり、その点のご説明が省略されているのは惜しい点である。また、これは権門都市京都の問題とも関連して、氏が本論では意図的に除外されていることではあるが、公儀、幕藩権力と宮廷諸勢力、国学の関係について論ずる機会をお持ちいただければ、多極的な権力構造と都市空間の有機的関連、またその思想に与える影響についてより全体的な見通しが読者に示されることと思う。いずれにせよ「国学」という、後に社会の転換期に思想的、社会的に大きな影響を与えた問題は思想史研究者以外にも広い関心者層を有しており、そうしたものの一員として、筆者は氏がこの問題について一層深く多角的な分析を続けられ、包括的成果を上梓されることを衷心より願うものである。

江下以知子（東京大学大学院工学系研究科博士課程）

報告要旨　「聖なる都市」のトポグラフィ――ヨーロッパ中世における都市イデア」

本報告では、西洋中世において都市がいかに表現・経験されたかを検討することを通じて、都市イデアへのアプローチを試みた。キリスト教的世界観におけるエルサレムは、ミクロコスモスとしての都市の表象の原型であり、多くの複製が生み出され、都市内においては儀礼によるコスモロジーの具体的空間化が図られた。都市建設を天地創造の模倣とみなす観念は、12―13世紀に出現する直線的なレイアウトの中に窺えるが、その背後にある実践知とその担い手を解明することで、イデアと現実の接点を探ることが可能になろう。

加藤玄（東京大学大学院人文社会系研究科西洋史学研究室）

伝統都市の比較史　ラウンドテーブル「都市の分節構造――江戸とパリ」

10月28日、東京大学法文1号館文学部115番教室においてアラン・チレー（Alain Thillay）氏を招いてラウンドテーブル「都市の分節構造―江戸とパリ―」（共催：フランス極東学院）が行われました。今回招聘したチレー氏は、パリのグランド・ゼコール準備学校教授（アンリ4世校併設）で、近世パリ社会史研究の第一線で活躍する中堅の学者です。当日は午前中に吉田伸之氏（東京大学）により今回の企画に関する「問題の所在」が述べられた後、チレー氏による講演「サン・タントワヌ城外区：パリ職業世界の実験場（1657－1791）」が行われました。続いて午後は中野隆生氏（首都大学東京）による「シュレーヌ田園都市の住民構成、1926～1946――パリ郊外の社会住宅をめぐって」と横山百合子氏（立教大学非常勤）による「19世紀江戸・東京における髪結と女髪結」という二本の報告が行われ、高澤紀恵氏（国際基督教大学）と森下徹氏（山口大学）によるコメントがなされ、その後、会場全体を交えての討論が行われました。なおチレー氏の講演では、仏文資料に加え、坂野正則氏（東京大学）の翻訳による詳細な和文レジュメが配布され好評を得ました。また当日の参加者は45名程度でした。

感想　「都市の分節構造」をつくる契機

過去の人々の日常生活世界の再構成を、多くの歴史研究者が試みている。そうした研究は史料的な困難を克服しつつ、家族・職業団体・村・都市など法的・行政的枠組みによって容易に認識される結合関係だけでなく、過去の人々の近隣・顧客関係などによって形成される結合関係をも解明してきた。

去る10月28日、「都市の分節構造――江戸とパリ」のタイトルで行われた１日がかりのラウンドテーブルでは、近世から20世紀までのパリおよび江戸・東京において、何らかの意味で「周縁」に位置していた人々の生活世界が取り上げられた。

まず午前のアラン・チレー氏による講演「サン・タントワヌ城外区：パリ職業世界の実験場（1657-1791）」において取り上げられたのは、当時のパリ市の東端に位置し、パリ市のほとんどを覆っていた同業組合の規制を受けないという意味で「周縁的」な、同地区の住民の世界であり、この地区の住民たちが、さまざまなかたちでパリの同業組合の世界と関わりながら生活していたことが報告された。午後の第１報告、中野隆生氏による「シュレーヌ田園都市の住民構成、1926-1946――パリ郊外の社会住宅をめぐって」では、パリ郊外が舞台となる。建築側の構想ではここに「階級協調」の住民集団がつくられようとしたこと、実際の住民構成もパリと地元シュレーヌに勤務する、ホワイトカラーと労働者が混ざっていたことが明らかにされた。第２報告の横山百合子氏による「19世紀江戸・東京における髪結と女髪結」では、江戸において営業を禁じられ周縁化された女髪結が取り上げられ、江戸期における彼女たちの存在と、明治初頭に彼女たちが独自の論理で存在の可視化すなわち営業の正当化を求めた点が報告された。

冒頭、吉田伸之氏による問題の所在の提示において、都市の「即自的」・「対自的」な分節構造に関する氏の見解をもとに、社会的結合の具体例の分析・叙述から比較までの見取り図が示された。また高澤紀恵氏がコメントの中で指摘したように、チレー、横山両氏の報告は、「捕捉されない世界」に注目することによって、あるいは通説に挑戦し、また従来の研究を豊かにするもくろみを持ったものであった。中野氏の報告も、地縁的結合ではあるものの階級や職業といった枠では捉えられない集団に関わる。

ところで行政側の文書を主な調査対象としている私は、これらの結合関係について、それがフランス王権によるサン・タントワヌへの特権付与、あるいは住宅公社による田園都市そのものの創出、幕府による女髪結営業の禁止といった、言わば上からの法的・行政的枠付けを契機として形成された点に興味をひかれた。対象となる時代・地域が異なれば、そこで容易に認識される結合関係、例えば行政的な区分や統計調査における分類基準が異なる。ひいては容易に認識されない結合関係、すなわち行政や統計調査において不可視化され、下から自律的に形成されたかのように見える結合関係もまた、

異なるかたちで研究者の前にあらわれるだろう。これら上からの契機と下からの契機を絡ませる視点を、他領域の研究者から学ぼうとするとき、そこで比較されるのは（もう一度）権力構造だろうか。

聞きながら私の思考はうまくまとまらず、あるいはミスリードされていったかもしれないが、刺激を受けた１日であった。最後に、このラウンドテーブルはギョーム・カレ氏の流暢な通訳により、参加者にとっていっそう意義深いものとなったことを申し添える。

永井敦子（静岡文化芸術大学）

伝統都市の比較史　ワークショップ「近世パリ都市社会史の方法」

10月30日、二日前のラウンドテーブルに引き続き、東京大学山上会館001会議室においてアラン・チレー（Alain Thillay）氏を講師に迎え、ワークショップ「近世パリ都市社会史の方法」が行われました。午前中行われたPart Ⅰ では「近世パリ都市社会史における一次史料の利用について―公証人文書・治安関係史料・破産宣告書―」、午後二時から再開されたPart Ⅱ では「パリ社会史へのアプローチ――方法と構築」と題し、少人数の演習＋講義の形式で行われました。ここではワークショップとラウンドテーブルの両日程の感想を掲載いたします。なおチレー氏の演習・講義では、仏文資料に加え、坂野正則氏（東京大学）の翻訳による詳細な和文レジュメが配布され好評を得ました。また当日の参加者は25名程度‘でした。

感想

10月28日・30日、「伝統都市の文節構造」としていくつかの報告・講演が行われたが、この中でパリ・アンリ４世校教授アラン・ティレー氏の報告・講演を聞く機会を得た。

28日には«Le Faubourg Saint-Antoine, laboratoire du monde du travail parisien (1657-1791)»（サン＝タントワヌ城外区：パリ職業世界の実験場（1657-1791年））と題し、ギルド制に基づく職分規定が厳しい当時のパリの中で例外的に自由職業が認められていたサン＝タントワヌ城外区での手工業者らの活動についての報告がなされた。ティレ氏の研究は膨大な史料に基づく実証的なものであり、当時の手工業・小売業のありかた、外国人を含む手工業者らの社会などを具体的に示すと同時に、散逸史料が多い状況下で近世パリ手工業・小売業研究を進めるための着眼点や手法の点でも多くを示唆するものだった。

30日には方法論に関わる２つの講演が行われた。午前には«Introduction à l'histoire de Paris et à sa bibliographie»（パリ社会史と文献へのアプローチ）と題し、近世パリ社会史研究に関する研究文献が様々な角度から紹介された。通史などの基礎文献から衣食住・空間などのテーマ分析まで多くの文献が挙げられたが、それらが典拠とする一次史料と共に紹介されたことは忘れてはならないだろう。配付資料にはパリの図書館・古文書館情報も付されており、文献・史料にすぐにアプローチする手掛かりともなる講演だった。

午後は«Introduction à l'histoire de Paris: exemple d'exploitation de quelques sources»（パリ史へのアプローチ：一次史料利用の例）として一次史料の扱い方についての講演がなされた。近世パリ史研究における第一級史料である公証人文書の種類と保管場所などの説明に続いて数種類の公証人文書の複写が配布され、文書の定型などの詳しい解説と共に読解方法が具体的に示された。手稿文書の読解は歴史研究には不可欠な技術だが、ヨーロッパの古文書について日本で実践を学べる場はほとんどない。フランス近世史を学ぶ者にとって非常に貴重な機会だったと言えよう。

角田奈歩（日本学術振興会特別研究員・お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程）

都市史研究会シンポジウム「分節構造と社会的結合」

11月11、12日の二日間にわたり、東京大学工学部1号館15号教室において、「分節構造と社会的結合」と題したシンポジウムが開催されました。当日の報告者とタイトルは以下のとおりで、34名の方が参加しました。なおこれらの報告の詳細は来年発行される『年報都市史研究15　分節構造と社会的結合』（山川出版社）に収録される予定です。

11日（土）

吉田伸之氏（東京大学）　問題提起

井上徹氏（大阪市立大学）　「中国近世の都市と礼の威力」

岩淵令治氏（国立歴史民俗博物館）　「江戸の武家屋敷―江戸勤番武士像の再考―」

近藤和彦氏（東京大学）　「19世紀初頭の英国チャリティ調査報告 ―問題の所在―」

12日（日）

岸泰子氏（京都大学）　「近世禁裏御所と都市社会――内侍所を中心として」

大田省一氏（東京大学）　「仏領期ベトナムの都市組織の再編」

佐賀朝氏（桃山学院大学）　「町村（まちむら）の近代化と地主―大阪・難波村を事例に―」

参加記

今年度の都市史研究会シンポジウムは、「分節構造と社会的結合」をテーマに掲げて開催された。初めに吉田伸之氏から問題提起がなされ、テーマに掲げた二つの点に加え、比較類型把握の方法とその意義が主張された。すなわち、全く異なる社会の、類似の局面をそれぞれ詳細に分析した上で、相互に比較対照することは、両者の共通性と差異性とを同時に認識することを可能にする。この分析が緻密さを増す程、比較史もその意義を増す。また、この比較類型把握の方法は、同一国内においても、異なる社会集団間の比較の上で重要な意味を持つ。

以上のような視点から、本年度は井上徹氏、近藤和彦氏、岩淵令治氏、岸泰子氏、大田省一氏、佐賀朝氏の六名の方から、清・イギリス・江戸・京都・ベトナム・大阪といった様々な国や地域をフィールドに、時期としては近世・近代を対象にした報告が行われた。それぞれに興味深い報告であったが、自分自身が日本近世の都市社会構造を研究テーマとしている関係から、時代は異なるがとりわけ佐賀氏の報告が刺激的であった。そこで、ここでは佐賀氏の報告について記すことにしたい。

佐賀氏の報告は、「『町村』の近代化と地主―大阪・難波村を例に―」と題し、大坂三郷の南端と接する「町村」難波村をフィールドとしている。そして、近世からの社会構造の連続性をふまえ、明治前期において、内部に町を包摂する「町村」の地域社会構造とその解体のあり様を、地主の動向に即して解明しようとしたものである。参考までに報告内容を要約すれば、以下の通りである。

難波村は近世から畑場であると同時に、三郷の拡大に伴い都市化が進展した典型的な「町村」である。村内は、本村・川東・西畑地の三つの地域に分かれており、近世から本村の西南部分に町が展開、町の枠組みは明治10年頃まで村政上意味を持っていた。一方、明治10年代は難波村全体に多くの下層民が流入、特に川東には多数の借屋が展開し、成舞長左衛門は川東の状況を重視して、戸長として救済策を講じていく。しかし、明治19年隣接する長町の貧民移転問題で村民の反対に遭い、戸長を辞職する。戸長辞職後は村内で煉瓦工場を経営するなど、近代工場経営へ積極的に関与した地主の一人であったが、明治20年代半ばに経営に失敗、のちには難波村の所有地も手放し、大阪を離れることになるのである。

二日目の全体討論の場では、以上の報告内容について、佐賀氏から今後の課題として、第一に「町村」と通常の町との差異性＝「町村」の町の特殊性の解明、第二に①近世段階における難波村の「町村」の解明と②成舞家の経営、社会的権

力としてのあり方の解明を踏まえ、両者の関係について考える必要性が述べられた。

佐賀氏の報告で注目されるのは、第一に近世と近代とを単純に区別せず、むしろ社会の実態解明の上では、近世から近代への連続性を重視するとの立場が強調されていることである。こうした主張に、時代区分を越えて社会の実態を考えることの重要性を改めて認識させられた。第二には個別事例研究の未だ少ない「町村」について、難波村という一「町村」に即して具体的に検討を行っている点、特に近代以降のあり方について分析している点である。こうした点は、近年の都市史研究で注目される「町村」の社会構造研究を大きく進展させることになるであろう。以上二つの点は、同時に自分自身の研究テーマについて考えていく上での重要な示唆にもなった。

一方で、疑問点もあげられる。第一には町が展開する本村と長町に隣接し下層民が滞留する川東とを、佐賀氏は一体の社会として捉えている点である。しかし両者は空間的に離れており、地域も区分されている。こうした事実に、より積極的な意味を見いだせないだろうか。すなわち、難波村の分節構造として本村と川東とを区別して捉え、まずはそれぞれの社会のあり方を個別に解明する必要があるのではないか。その上で両者の関係性を明らかにし、改めて「町村」難波村の全体構造を捉え直すという、より丁寧な分析が必要であると考える。

第二には、行政単位の村という側面や、西畑地を中心とする耕地部分の所有状況や経営のあり方が、村内の社会構造をどう規定していたかという点である。都市的要素だけでなく、農村的要素についても詳細に分析にすることが、「町村」の社会構造を考える上では不可欠であると考える。

今回の報告後にさらなる精緻な分析が加えられ、今後他の「町村」との有意義な比較類型把握が行われることを楽しみにしたい。

松田暁子（東京大学大学院人文社会系研究科修士課程）

第59回都市史研究会例会（第５回とらっど３研究会）

11月23日、東京大学出版会会議室において第59回都市史研究会例会（第5回とらっど３研究会）が行われました。当日は谷川章雄氏、松本裕氏、伊藤重剛氏による報告が行われ、活発な討議がなされました。報告要旨は以下のとおりです。

報告要旨　「江戸の「穴蔵」をめぐって」

江戸の「穴蔵」をめぐる建築史・歴史学・考古学の従来の研究をレビューし、発掘された「穴蔵」の今後の分析視角として、以下のような点を指摘した。①「穴蔵」の系譜と防火用「穴蔵」の成立、②台地上と低地という２系統の「穴蔵」の構造と技術の変遷、③台地上と低地の「穴蔵」の関係、④「穴蔵」と土蔵の関係、⑤「穴蔵」の階層性、すなわち大名屋敷・旗本屋敷・組屋敷・町屋の「穴蔵」の規模・構造と規格性、⑥「穴蔵」の地域性。

谷川章雄（早稲田大学人間科学学術院）

報告要旨　「都市組織」

歴史中心地区・パリ市第２区（ボンヌ・ヌーヴェル地区＋マイユ地区）を事例として取り上げ、伝統都市の特徴の一つである「都市組織 (urban tissue/fabric)」の重層過程を考察した。内容的には：①「都市組織」の定義、②「都市組織」と「都市類型」との関係性、③「都市組織」に着目した既往研究分析（イタリア・ムラトーリ学派研究のフランスへの導入と展開）、④地籍図を中心とする一次資料の検証と「地割組織図」の復元方法、⑤フランス革命とオスマンのパリ大改造を通じた「都市組織」の変遷にみる近代都市化、以上、５項目についての報告を行った。

松本裕（大阪産業大学工学部環境デザイン学科）

報告要旨　「ローマンタウン」

ローマ都市は、都市インフラとして城壁、舗装道路、上下水道、広場など、西洋の都市の原型となる要素を作り出した。その中で街路は格子状の道路網として整備され、歴史的には古いギリシア時代の細長い矩形の街区から、次第に短い長方形となり、最終的にはローマ時代にほぼ正方形に近い街区の形に収斂した。また大通りは両側に列柱を配置した格式高いものとなり、都市景観を壮麗なものへと変貌させた。

伊藤重剛（熊本大学）

次回以降の研究会のお知らせ

なお、下記の例会予定は、やむを得ない事情により変更になる場合があります。例会につきましては、毎回メールでもお知らせしますので、その都度ご確認ください。また４月以降の予定は次号ニューズレターでお知らせします。

第60回例会（第６回とらっど３研究会）

日時　2007年１月27日（土）14時～

会場　東京大学出版会会議室

14:00～　高橋慎一朗氏「都市と宗教権力」

15:00～　本康宏史氏「軍都金沢」

16:00～　高村雅彦氏「中国共産主義のイデア1949―」

第61回例会（第７回とらっど３研究会）

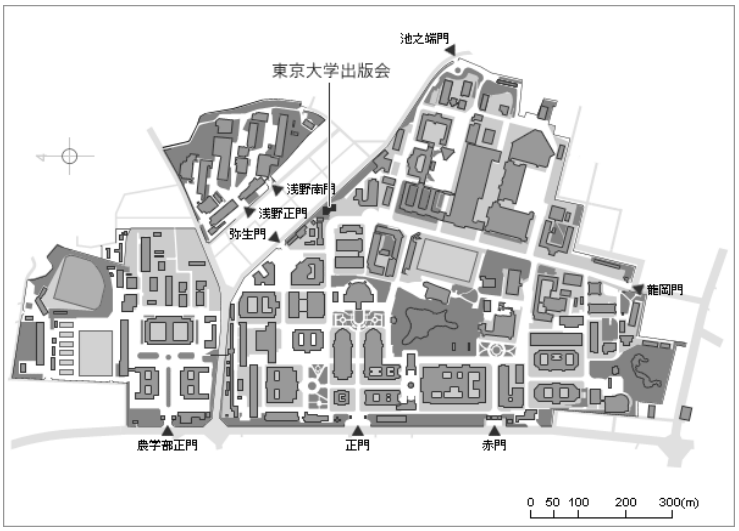
日時　2007年２月17日（土）14時～

会場　東京大学出版会会議室

14:00～　熊遠報氏「胡同」

15:00～　池田嘉郎氏「モスクワ」

16:00～　青木祐介氏「横浜」



［東京大学出版会の場所］

第62回例会（第８回とらっど３研究会）

日時　2007年3月9日（金）14時～

会場　未定

14:00～　橋場弦氏「民主政と権力」

15:00～　青島陽子氏「ペテルブルグ」

日時　2007年3月10日（土）10時～

会場　東京大学出版会会議室

10:00～　鈴木博之氏「産業革命と都市」

11:00～　亀長洋子氏「商人家族」

12:00～　森田貴子氏「不動産」

（休憩）

14:00～　五味文彦氏「武士と都市」

15:00～　清水和裕氏「バグダッド」

16:00～　山下惣一氏「浜人」

News Letter 都市史研究 Vol. 54
2006年12月15日発行

事務局：〒113-0033　文京区本郷7-3-1　東京大学大学院人文社会系研究科日本史学研究室内
編集担当：横山百合子（東京都公文書館）、初田香成（東京大学大学院工学系研究科建築学専攻）
レイアウト原案：岩本馨（京都工芸繊維大学工芸科学研究科）